



浮城流神楽
 其五

^ 13
 3299
 25



3299
25

修澤琉球軍務紀略卷之廿八

大正十年八月九日
本大學出版部
贈

目録

茶磯榮

- 一 鴻津家久琉球王と對面の事
- 一 向の去る所と琉球王の事
- 一 琉球王の事
- 一 琉球王の事

目録
一 徳川家康の生涯
一 徳川家康の政治
一 徳川家康の軍事
一 徳川家康の文化

鴻澤流球軍精武巻廿六

家久流球王小對西の事

并に原武流球王小對西の事

日比山の守将王震文威とにらむ

〜〜〜 治きちり〜〜 大武流球王小對西の事

神小色下 初りんとあ〜〜 けるん中

新子張曲橋林貞貞 糸流流と流るの事

流涙のまがよく身た〜まつけま〜
彼ホ小に義の實と見え〜
味方のあふい徳の徳〜
あふい平國のゆみ〜
い國の人と〜
か〜
か〜
武蔵一世の靈氣といつ〜

子日山の城小なりと名義小利其お
とき〜使せんと〜
海の斗ひ小用ひん乃あ花子ととめ
糸つ花とき〜
乃たせび乃花子と用ひ乃花情と下知
〜
のん乃と乃乃さび〜
させ〜
乃不流涙王徳乃乃王乃

もと小治系せ〜武蔵守はひ
の王城〜河原の國の武官の
み小不〜小印れと〜味方の軍勢
礼婚後痛といま〜めりた大軍先滞
まるとい〜とも物も終法と礼〜も〜釋
澄り〜一〜回の中央大き〜小娘び毎
の思ひと〜孫幼ま〜のあ〜り〜は
ふ〜〜流城王を軍法嚴き〜を感ト

佐方人も感凡小忍〜物ま〜のあ〜く〜丈
り〜味〜の感と武蔵守死〜〜布〜
のちりにあ〜め〜付流津大瑞守家久ハ
也大將も〜小〜〜去り影日高回〜之船
せ〜〜〜以旗本の云〜方余終中〜每溪
謎の女故小抄〜武蔵と〜の〜先年の
軍日〜小治を〜〜〜と怪西小乳〜味
方の指利と怪び〜あ〜ま〜る〜不〜軍師武蔵守

一氏流珠王并官人小と引つと束りし
ふ家久人し城小あわし 流珠王小對西あり
軍師一氏征軍と分く 敵を小休させ
城のあむ小弓 修地檢りと隙せを卒と
此の十箇(馬)とあしとを中と武
者も自ら案内しと 珠系の子を小休ひ
美と色り大守家久いと 是れ子有く 船取
おもひ覺と道あり小休せ 細威の遣小こま

依りのちりと帯し 是れと ぬれ月
松尾を介 湯津あつの大名を小列り
是れしと 扇をとりしと 和(衣)を或る
い傍小休し 一人家久小引合せ 回
王姑もゆく 路をゆく 是の命と小
珠とべしと 舟留えの お中付ひ事り
去上をも 大羽ちるひ 小休ひ 流珠王小引ひ
海河とのりしと 中とれりし 我は 友軍る

と度々〜西の國と抱き合ふ事一人のこと
も〜小つら〜日将軍の令を中依て
あり新中高國の船部せんとの屬主ありと
い〜も國弱小〜とをのみをゆる由
付文の國〜の〜高船と我薩列
送下高堂とあ〜琉球王の自
價ひぬれを好むをきかち〜に
くに都國あ〜日将軍一及れたとも

あ〜に於鮮中も改〜自らの
ろ〜有小帆あり志ろの〜國の平
安ぬふれせ〜た小於小暮り柳も法
終とる〜せ〜の〜我國小風
也に〜小台命下り障の事ありい
ま〜此び〜を〜とれ〜と
事あり〜高國の威威と我國〜指揮
ま〜ふ〜新〜も満〜とる〜去此の利

舞に〜とあるは下ノ景花也其の時
あとも多ぶか母も又道〜日業自得
の派の〜する事〜あつ〜〜自らの
回とび家業〜あぶえしゆ〜ん〜い〜と
〜能〜能〜も人のあふ派とせめ
し得〜却と〜り〜めめ王理しあ
心〜回〜のろひとのぐん〜家〜又
安事あり我年〜初ち王の候し〜とは

回長久のも復人高をかり〜下〜
降伏せ〜し〜家軍威のたまふ
つ〜び〜し〜回と王のゆゑを
降ふを〜し〜事〜れ〜心〜
ひ〜降〜る〜る〜き〜ど〜は〜後南船おもは
〜下〜母〜と〜ち〜く〜ま〜る〜
ひのち事〜高回の船志思あ〜
〜神回の中下屬〜〜体とを〜

外國こくごより一ひと回かい小使せうしを遣つかはさるる
 比ひは是こゝに長ながく入いる其そのの基もとひより一ひと回かいの利りと
 復またも一ひと回かい琉球りゅうきゅうを攻せうめんと一ひと回かい目めを利り
 一ひと回かい系けいも又また小せう使しを遣つかはさるる其そのの度たびも眼がんを利り
 隣りん回の情じやうをさるる其そのの利りと志しす一ひと回かい
 うらむ其そのの回かいの真ま真ま派はい人にん卒そつの大だい恩おん何なにとと
 つまは致ちす中ちゆうのきや子こを致ちす一ひと回かいにいつる
 まゝ一ひと回かい却かへはせむ一ひと回かい情じやうを利りと今いまも

比ひは是こゝに長ながく入いる其そのの基もとひより一ひと回かいの利りと
 復またも一ひと回かい琉球りゅうきゅうを攻せうめんと一ひと回かい目めを利り
 一ひと回かい系けいも又また小せう使しを遣つかはさるる其そのの度たびも眼がんを利り
 隣りん回の情じやうをさるる其そのの利りと志しす一ひと回かい
 うらむ其そのの回かいの真ま真ま派はい人にん卒そつの大だい恩おん何なにとと
 つまは致ちす中ちゆうのきや子こを致ちす一ひと回かいにいつる
 まゝ一ひと回かい却かへはせむ一ひと回かい情じやうを利りと今いまも
 比ひは是こゝに長ながく入いる其そのの基もとひより一ひと回かいの利りと
 復またも一ひと回かい琉球りゅうきゅうを攻せうめんと一ひと回かい目めを利り
 一ひと回かい系けいも又また小せう使しを遣つかはさるる其そのの度たびも眼がんを利り
 隣りん回の情じやうをさるる其そのの利りと志しす一ひと回かい
 うらむ其そのの回かいの真ま真ま派はい人にん卒そつの大だい恩おん何なにとと
 つまは致ちす中ちゆうのきや子こを致ちす一ひと回かいにいつる
 まゝ一ひと回かい却かへはせむ一ひと回かい情じやうを利りと今いまも

あしし忠國の法士と築く務軍の候ひ
と申し男色使と申すくい返と務軍
と申せられり同く六月廿日未湯の候
午申小治之をりれも留置衣の候に
と申すをり候申小治中りれも申す
候ひの余り自ら候つて出女子相候ひ
く申す小入候にめんく申すの候
功高家武らの眉目いりや有(き)法士の

功高家大ひあんと申せられり
別軍の略候とくゆりせられ
候小一家申す万軍と留候びり家久
又とお徳一琉球王と一申す
申す書言と徳め武高もが
字(ま)きその國の事と徳一
と申すてあし忠國をり申す
り

虎列河上侵入来し事

并武彦も首領と死す事

新納武彦も一氏に流罪の被り有る事
 國政と云はれしも有り
 大車りく大王と付ひる國王
 左列ちちと右の送長とせし事
 せんと號しければ先高國
 元回ちとと下りの城
 小味方の大将と

合く身優の事と今ぞ

要濱遊木城
 千里山城
 虎行城
 元野浦園所
 中尾松平城
 赤念島
 了風

種馬大孫
 里見大目元
 細物解中
 秋月左衛門尉
 松平内務卿
 江戶二府左衛門
 藤原活助

新町市場

王 城

日 氏 山 城

花房玄原

松尾 年人

花房 年人

鴻澤 宗女

幼のゆ〜中流〜軍勢もその年の命
ホ土年ともいっておも〜しに死〜武蔵も
おゆるとと年〜〜土主徳信人とはひ

船小舟宗薩列〜〜一人の群集〜〜其の
頼と〜〜一回の参軍師の古功〜〜私
浪板び町〜〜石姓〜〜巻小と〜〜
り〜〜麻史流の城中小〜〜琉球王と
宗屋小〜〜長〜〜員と〜〜て答意
徳信人〜〜山海の浮味と〜〜
張乞大〜〜あ〜〜長〜〜琉球王小
封西〜〜急情接〜〜〜〜六と王并

小徳庵人小島の魁勳町守をうと感
悦く追留をさる程小徳列の花柳
層小島來去く琉球仕仕のしと治
書等とえ方れ 神長義松の書等
西渡りりしをに月廿日復航して
志を自ら合致小及び六月八日
一箇全く年定一箇全く徳庵人小
路系信 統 徳小半余日の申

小徳仕をせ 半天晴斎代の名
武勇の語はあつと感 主功
廿一と市村小徳と使と ち多
忠政小徳奉書と流しと徳列下
けりち多忠政庶民流しと
ち多自出く小徳と使と連
志と取り忠政列小徳奉書と
お徳 琉球小徳といども日
の比と致と

〜自とせ〜 び〜 不中とありしを以て
江代とく〜 本日小を功成れ〜 國王政系
させらるゆへに今ため〜 なき勲功感もるに
余りなり花〜 初ら善治のど〜 琉球
と〜 新〜 治津の層回〜 じまの
中〜 じまの〜 じまの〜 じまの〜 じまの
奉書と以裁〜 均入平をま〜 小ま〜 七郎
江代は度方〜 じまの〜 じまの〜 下されふ小

あ〜 じまの〜 角目真かむ徳小は〜 じまの
系海回をま〜 系〜 仕〜 仕〜 仕〜 仕
却〜 中〜 使〜 使〜 使〜 使〜 使〜 使
返〜 返〜 返〜 返〜 返〜 返
の〜 琉球王政系は〜 せ〜 せ〜 せ〜 せ
仁徳將軍家の嚴威とあ〜 ぬ〜 ぬ〜 ぬ
心〜 心〜 心〜 心〜 心〜 心
は系府は〜 じまの〜 じまの〜 じまの〜 じまの

得義つぎゆるしく運う意い示し乃のびびのの使しの
中なかをを果くわるる事じ中なかをを反かへりり方かた宜よろしくしく申まをすす
下くだささるる事じををりりれればば忠ちゅう政せいちちひひ小せう威ゐととて
終はつもも斗とひひ中なかををしし一いつととのの事こと 神かみ異い別べつと
とと言いのの旨しめののあありり久くわ琉りゅう球きゅう征せい伐はつははららるる事ことも
回わい法はふとともも一いつ事じ終はつととせせむむんんにに過あや誤ご津つ家け
私わがのの征せい伐はつととあありりてて彼かの國こくの中なかをを後ご日じつのの變へん更しん
心こころららるる事こと一いつ終はつりりぬぬはは反かへ降くだままととららるる事こと私わが

ああららるる旨しめとと志し一いつのの後ごのの幸さいひひああららるる
一いつとと言いひひ一いつ事じ軍ぐん号ごう有ありりれれたた降くだまま
一いつ國こく小せうあありりてて兵へいはは是こゝ柔じゆう府ふあありりててああららるる事こと也なり
一いつとと申まをすすれればば家け久くわ保ほひひ地ちははああららるる事こと也なり
念ねん休きゅう休きゅうひひ生せいとと休きゅうととををりりてて清せいとと復ふくととももああららるる事こと也なり
一いつとと言いひひ下くだささるる事こと一いつとと有ありりるる事こと也なり申まをすすれればば同どう
一いつとと言いひひ薩さつ州しゅうとと一いつとと言いひひ播はく磨ま府ふ小せうあありりたたのの意いをを
ととせせししとと一いつとと言いひひ神かみ異い別べつとと一いつとと言いひひ小せう威ゐとと有ありりて

坂月おく斗ひしとの争しに宣ひ奉るを
 今やと結せみひりるあ久いし中と琉球
 王小中守せ生との目えは度合致のる
 討たし首殺法士のる名味方のも負
 討死の目録持来せしとく軍師武
 意ちし人平しと是と死ししりり

を死ししりり

首殺百十二と捕七人 程ヶ嶋大橋と討死

- 一日 百十一と捕七人 里見大内丞はめ
 - 一日 百一 細勅解中回り
 - 一日 百十 仁本三郎と島はめ
 - 一日 百十 秋月大進と尉回り
 - 一日 百十 松尾隼人回り
 - 一日 百八と捕十五人 佐野平次回り
- 以内琉球の猛士大將軍の首七つを王
 以人官人三人と年報多めと死小及びん

一月 十日

花房を了る日

一月 十日

二好曲撰日

一月 八日

矢沼を了る日

村元首殺被合六右以下

味方討死の事

佐助等が政敵を斥けしむる事その事

ともいふ中の人

兵衛屋探知も 三十一人

赤念五右衛門新も 七十人

有馬五右衛門新も 五十人

氏に及ぶ馬新も 廿九人

小湊松五郎新も 四十人

二里波 門 新も 中の人

池田新五郎新も 十人

小松系信五郎新も

右の御承知と儀徳五将の諸の事新も

